

贈答・饗宴の品々、そして年中行事

——『天文日記』から、「大坂寺内町の日々」(二)——

水藤 真

論文要旨

『天文日記』は、天文五年から同廿三年にわたって、本願寺の第十代の法主である証如の記した日記である。本稿は、この『天文日記』に記された、様々な品物を取り上げ検討を加えたものである。

最初に「飯」・「魚」・「酒」・「鳥」を取り上げて考察を行った。その結果、これらの品々の多くは、年中行事の場面や特別な饗宴の席で使われ、また、特別な意味をもった贈答の品として使われたものであったことが判明した。それらは、単に物の名として記されていたのではなかった。それは日記の特性でもある。日記は日々日常のことを記しつつ、いつものとは変わったことを記すものである。更に、五穀・菜・朝勤・白帷・金などの品々と行為を取り上げ分析を進めると、ますます、特定の品々や行為が年中行事と深い関わりをもっていたことが確認できる。

こうして改めて年中行事の意味を問い直すと次の二点が確認される。一つは、年中行事は本願寺の門徒支配にとって必要不可欠のものであったこと。即ち、それは

本願寺と門徒との絆を確認する行為であったことである。二つ目は、この年中行事には階層性があり、それが混在したものであることである。即ち、ここでの年中行事には、①世間一般に共通するもの、②本願寺または、法主が宗門を代表して行うもの、③本願寺法主個人に関わるもの、④大坂寺内町のもの、この四者が混在しているのである。こうした階層性の存在は、今後、村や町の年中行事を考察する際にも生かされるべきであろう。

以上、様々な品々がかくも多数存在したことを確認すると、今後の展望として以下の点が明らかになる。即ち、農業生産のみでなく、当該社会の生産の総体を明らかにすべきである、と。

なお、贈答の品々を紹介する中で、戦国時代に大判・小判に相当する金貨が存在した可能性についても触れている。